発表者　高岡第一学園認定こども園第二幼稚園　谷川　淳郎

協議主題

幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

1　主題について

「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)」等が策定されたことで、本園でも幼保小の円滑な接続の重要性を認識するとともに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて子供の姿を捉えることで、生活や学びの質を高めていく機会となった。遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な接続を図るためには、保育者と小学校教員が子供の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。

本園では、令和４年度より、幼小の円滑な接続に向け、隣接する高岡市立古府小学校と連携を進めてきた。令和６年度からは、子供同士の交流や保育者と小学校教員の意見交換等、さらに活発な交流を行い、幼小協働による接続カリキュラムの作成にも取り組み始めた。しかし、効果的な接続カリキュラムとするためには、教育の目標や方法、子供への関わり方の違い等、互いの教育への理解がまだ十分とはいえない。また、複数園から小学校へ入学するため、本園だけでなく、小学校区内の幼保小と範囲を広げ、連携していくことが大切であると考える。

そこで、幼保小の子供や保育者と小学校教員が交流する機会をさらに増やし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに子供の姿を共有しながら、互いの教育への理解を深められるようにした。今後、協働して接続カリキュラムを作成していきたいと考える。

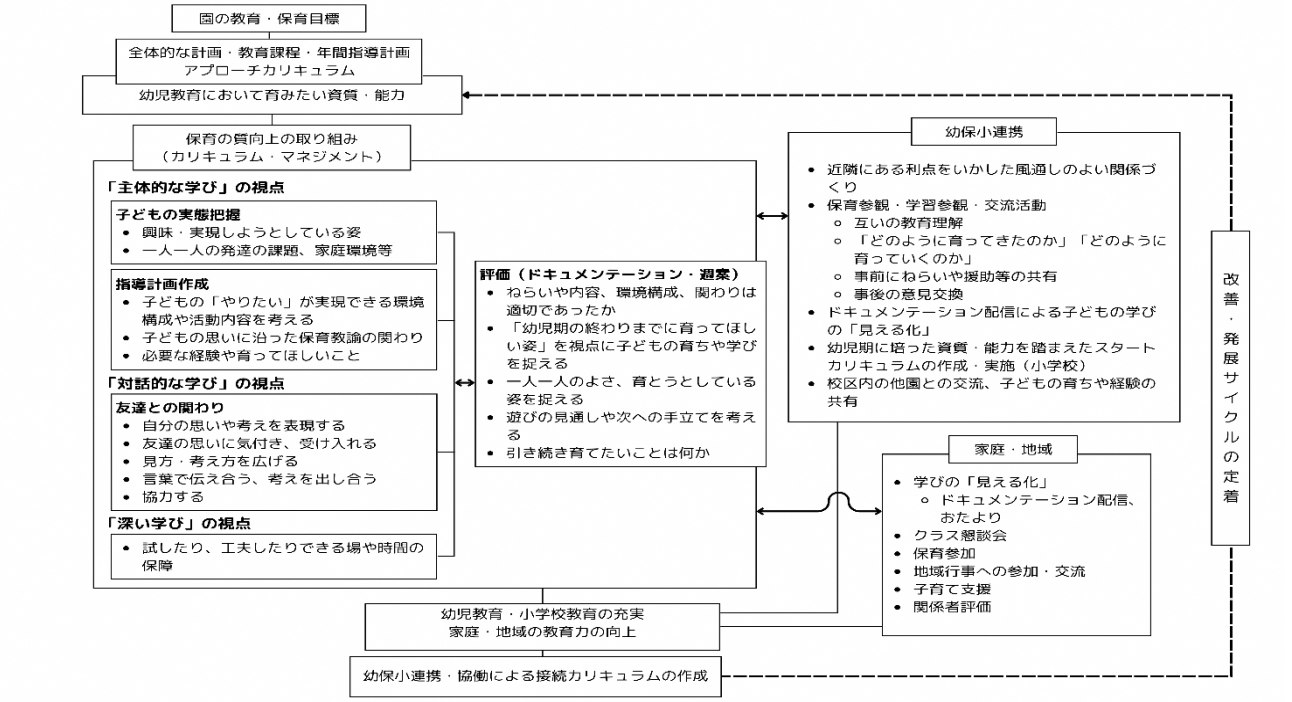
2　研究の視点

(1)　小学校区内の幼保小との連携を密にし、学習参観、保育参観、交流活動等を通して互いの教育への理解を深めながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに語り合い、具体的な子供の姿を接続カリキュラムに反映させる。

(2)　小学校教育を見据え、資質・能力をバランスよく育むための指導計画を立て、実践し、評価、改善を図る。

3　実践事例

【令和４～７年度　幼保小接続計画】(「第二幼稚園令和７年度幼保小接続計画」より)



【主な取組】
〈令和６年度〉
・アプローチカリキュラム実施
・幼児（年長児）が児童（１年生）を招待しての交流活動「スペシャルランドで遊ぼう」と意見交換・・・【取組１】
・就学前の保育参観「ドッジボール大会」と意見交換（高岡市立古府小学校：教員）
・幼小協働で作る接続カリキュラムに向け、ひな型作成及び内容と項目の検討
・幼保小合同研修会に参加
〈令和７年度〉
・高岡市立古府小学校へのドキュメンテーション配信
・５年生体育科の学習参観（本園：幼児）
・公開保育「はと組忍者村で修行をしよう！の巻」・研究協議会（高岡市立古府小学校：教員、高岡市伏木古府保育園：保育士、呉西地区私立幼稚園・認定こども園連絡協議会研究委員）・・・【取組２】
・高岡市立古府小学校 要請訪問研修会「１年生体育科 チームでチャレンジ！わくわくまとあてゲーム」（古府小学校体育科部員、県小教研体育科専門委員、市小教研体育科部員、伏木地区幼稚園、保育園、小学校、中学校教員参観）
・高岡市伏木古府保育園 幼児教育施設訪問研修（本園：保育教諭、高岡市立古府小学校：教員）

【取組１】　幼児と児童の双方に意義のある交流の場を設定することで、互いの教育への理解を深める。
　幼児と児童の双方に意義のある交流とするためには、交流のねらいを幼小で共通理解することが大切だと考えた。また、日頃の幼児の様子を小学校教員に見てもらうことが相互理解につながると考え、年長児が１年生を招待する交流活動を設定した。交流活動前に打合せを行い、幼小の担当者同士でねらいや内容を共有した。交流活動中は、ねらいを意識した支援を行い、活動後には、双方の子供の姿を基にした意見交換の場を設けた。

活動名「スペシャルランドで遊ぼう！」対象：年長児 20 名、高岡市立古府小学校１年生 26 名

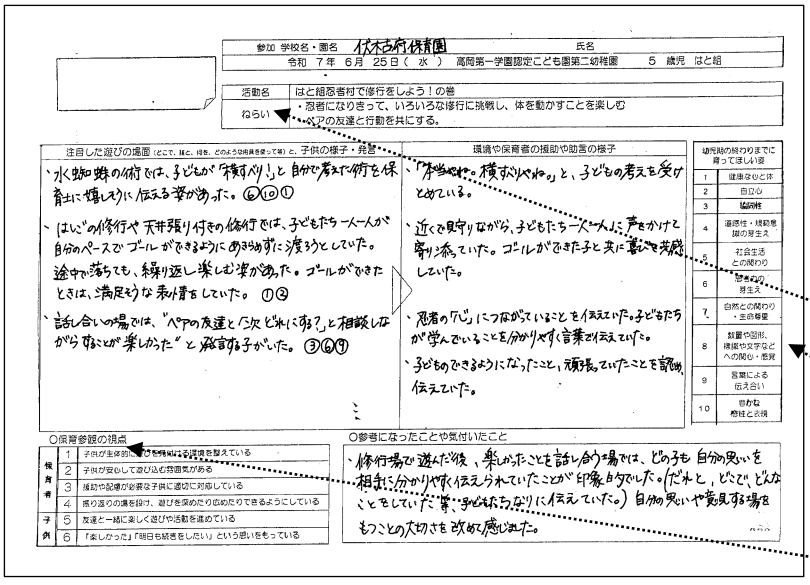
		幼児（年長児）	児童（１年生）
事前打合せ	ねらい	・児童と各コーナーで遊び、協力したり楽しんだりする。 ・交流活動を通して、児童に親しみをもち、就学を楽しみにする。	・幼児のことを考えて話したり遊んだりする。 ・幼児と関わることのよさや楽しさに気付き、進んで触れ合い交流する。
	活動内容	・幼児と児童がペアになり、各コーナーで遊ぶ。 ・ルールを守りながら、協力したり応援したりして遊ぶ。 コーナー：バスケットボール、ボウリング、段ボール迷路、エアホッケー、ドミノ、缶積み、もちつき、パターゴルフ	
	教師の支援・配慮	・子供たちが交流活動の見通しを事前にもつことで、目的をもって取り組めるようにする。	
		・児童と楽しく遊んでいる様子を見守ったり、幼児の思いに共感したりして楽しい雰囲気の中で遊べるようにする。	・幼児と仲よく思いやりをもって交流している姿を見守り、相手意識をもって仲よく活動できるよう声かけをする。

		幼児（年長児）	児童（１年生）
交流会に向けて	準備	・幼児が話し合い、協力して遊びのコーナーを作った。 ・製作過程で試行錯誤したり、遊びながらルールを考えたりした。 ・児童へ招待状を書いた。	・活動の目当てや約束（幼児との接し方、遊び方）を話し合った。
	事前交流	・小学校の体育の授業に幼児が参加し、児童と一緒に準備体操やなわ跳びをした。	

		幼児（年長児）	児童（１年生）
事後の意見交換	子供の姿	・普段大人しいため、交流を楽しめるか心配していた幼児が、笑顔で関わりを楽しんでいたことに驚いた。児童のリードのおかげだと思われる。 ・幼児だけで遊んだときは、ペアになっても個々で楽しんだり飽きてしまったりする姿が多かったが、今回は児童と協力したり競ったりして、関わりを楽しむ姿や遊びに集中する姿が見られた。 ・缶積みでは、１年生の積み方に刺激を受け、まねをする様子が見られた。	・積極的に幼児に関わり、リードしたり手加減したりする姿が見られた。 ・つい自分の遊びに夢中になる児童に声をかけると、はっと気付いてペアの幼児を気遣うことができた。事前に目当てをもっていたことで気付いたと思われる。 ・園児を思いやる行動ができていたが、言葉でどう伝えたらよいか分からない様子がみられた。言葉で伝えられるようになるとよい。
		・互いに慣れ親しんでいる「じゃんけん列車」を最初に取り入れたことで緊張がほぐれ、互いに笑顔になった。共通の遊びを取り入れたことが効果的だった。 ・難易度を自分で決められる遊びの工夫があり、ペアで相談する姿が見られた。必然的に関わりが生まれる環境設定がよかった。	
	小学校より	・活動を通して、幼児の育ちを知ることができた。小学校の教員は、１年生を「できることが少ない」と捉えがちだが、夢中で活動に取り組む姿や話を集中して聞く姿が見られ、今後の児童の見方や接し方を捉え直す機会となった。小学校はゼロからのスタートではないことが分かった。 ・小学校の教員は、幼稚園での学びをもっと理解する必要があると感じた。園でのねらいと取組状況についての情報があれば、小学校での指導がしやすくなる。生活科等において、学びのつながりを生かした指導をしていきたい。	
	園より	・小学校では、活動の目当てを児童が認識している「自覚的な学び」だが、幼稚園は「無自覚的な学び」であることに、幼小の違いを感じた。 ・幼児は、交流会に向けて、児童にどうしたら楽しんでもらえるか、みんなで話し合い、試行錯誤する過程で、【言葉による伝え合い】【協同性】【自立心】【思考力の芽生え】【道徳性・規範意識の芽生え】等の姿が見られた。 ・児童が幼児に接する姿は頼もしく、幼児にとってよい刺激や憧れとなった。	

【取組２】　保育参観を通して、小学校区内の幼保小との連携を図り、子供の姿を基に共通の視点で話し合う。

公開保育の際に、校区の小学校と保育園にも案内し、幼保小の保育者と小学校教員が共に参観し協議する機会を設けた。参観の手がかりとするために、「保育参観シート」を用意した。シートには、活動のねらい、参観の視点、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を記した。参観者はねらいと照らし合わせながら幼児の様子を捉えることで、協議会において話しやすいのではないかと考えた。参観後の協議では、注目した遊びの場面や子供の様子、環境構成や保育者の援助の様子について話し合った。



公開保育・研究協議会　活動名「はと組忍者村で修行をしよう！の巻」　対象：年長児 23 名（参加者：高岡市立古府小学校 教員、高岡市立伏木古府保育園 保育士、呉西地区私立幼稚園・　認定こども園連絡協議会研究委員）

「保育参観シート」を活用した子供の姿の見取り

活動のねらい

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

保育参観の視点
保育者・子供

別添資料１（**「第二幼稚園保育参観シート」より**）

〈壁を蹴って逆上がりをする場面〉
ペアの足を支え回転を補佐し合った。【協同性】

〈はしごを渡る場面〉
自分なりの渡り方を工夫し試した。【思考力の芽生え】途中で落ちても諦めずに繰り返し楽しみ、ゴールの達成感を味わった。【自立心】

〈土嚢袋を持ち上げて運ぶ場面〉
諦めずにやり遂げた。【自立心】
友達と力を合わせた。【協同性】

〈振り返りの場面〉
身振りを交えたりマメができた手を見せたりして、できたことや頑張ったこと、友達として楽しかったことを話した。【言葉による伝え合い】

〈参観者のシート記述より〉

参観後の協議会	小学校より	・幼児が夢中になって楽しく身体を動かす姿を大切にして、小学校の体育の学習につないでいきたい。幼児が飽きることなく遊んでいたのは、幼児の思いを膨らませる導入や挑戦したくなる環境の構成が充実していたからだと感じた。【健康な心と体】 ・幼児期に育まれた「運動を楽しむ」「進んで運動する」「遊び方を工夫する」力を途切れさせずに「遊びを通した学び」から「教科の学び」へと接続する点で、保育から学ぶことが多い。 ・幼稚園で身に付けた力が小学校では十分に発揮できていないように感じることがある。子供との関わり方や見取り等、互いの取組がどうつながっていくのかを、幼保小で共に考えていくことが大切だと感じた。
	保育園より	・最後の振り返りで幼児の意見がしっかり引き出され、静かに聞き合う姿が見られた。振り返りを通じて幼児が達成感や次への意欲をもつことができたと思う。保育園では遊びが単発になりがちで、幼稚園との違いを感じた。幼保の互いのよさを生かし、小学校に向けた保育や教育について今後も意見交換をしていきたい。
	研究委員より	・教師が幼児の興味・関心を高める言葉や認め励ます言葉をかけたことで、幼児はやる気を高め、安心して最後まであきらめずに取り組めていた。 ・教師が少しヒントを与えることで、幼児が自分で考えられるようにしていた。

4　明らかになったこと

(1)　交流のねらいを共有し、幼小の教師が事前と事後に協議したことで、子供の姿を具体的に捉えることができ、活発な意見交換につながった。また、活動の中で子供同士の自発的な関わりが生まれ、主体的に取り組む姿が見られた。子供が園でどのように育ってきたか、遊びを通して何を学んでいるかなど、目指す子供の姿や援助の様子を小学校の教師に見てもらったことは、「小学校はゼロからのスタートではない」という理解につながった。幼小の教師が協働で活動を計画・実施し、振り返ることで相互理解を深め、学びのつながりを意識した交流活動を充実させていきたい。

(2)　本園と古府小学校は以前より接続に取り組んできたが、今回初めて、小学校区内保育園の保育士を招いて公開保育を実施したことで、幼保小が互いに顔を合わせて話し合うよい機会となった。保育内容や経験に違いがあることを知ることもできた。また、「保育参観シート」を用いたことで、参観の視点が明確になり、保育者も小学校教員も共通の視点から話し合うことができ、有効であった。このつながりを今後も継続し、気軽に話し合える関係を構築していきたい。

5　今後の課題

小学校に複数園から入学することを踏まえると、本来は小学校区内の幼保小が協働で接続に取り組んでいくことが望ましい。今後も小学校との連携に加え、小学校区内保育園とも積極的に交流を図りながら互いの教育・保育観の理解を深め、同じ方向を向いて保育・教育に取り組んでいきたい。

幼保小共に、育みたい力は共通しているが、教育方法や評価方法の違いを互いに理解するには、さらなる交流や協働を積み重ねていく必要がある。育成を目指す資質・能力や、子供の発達、学びについて共通理解しながら、小学校での学びや生活が充実するよう、接続カリキュラムの作成に努めたい。